

# 海事英語辞書製作における multi-word expressions (MWEs) の認知的 アプローチ

池上彰<sup>\*1</sup>

## A cognitive approach to multi-word expressions (MWEs) in maritime English dictionary making

Akira IKEGAMI

### Abstract

The purpose of this paper is to discuss the description of multi-word expressions (MWEs) in maritime English dictionaries from a cognitive perspective. Japan relies on maritime transport for over 90% of its imports and exports. However, the educational materials used in institutions training maritime personnel for these international routes, particularly dictionaries, feature descriptions reminiscent of simple English word lists. This approach is intended for bringing dictionaries into the National Maritime Officer Examination to answer English questions, falling far short of content suitable for long-term learning plans. While dictionaries face space constraints, they must still meet usability needs. The research methodology involves listing entries from existing maritime English dictionaries and examining previous studies on MWEs descriptions. In addition, following the presentation of examples from learners' English-Japanese dictionaries, this paper proposes dictionary headwords incorporating multi-word expressions (MWEs). The descriptions include maritime English, based on the utilization of corpus data and the theoretical framework of metaphor, metonymy, and metonymy in cognitive linguistics. The main finding demonstrates that the cognitive perspective of maritime English blurs the semantic boundaries with general English. This provides an important point for discussion in vocabulary learning.

*Keywords: multi-word expressions, maritime English, cognitive linguistics, metaphor, metonymy, synecdoche*

### 1 序論

この研究に至った背景と目的について、海事英語教育の実態、筆者の経験や、使用される専門的な英語辞書の例を挙げながら、検証する。

#### 1.1 背景と目的

本稿の目的は、海運業界の英語教育レベルの質的な向上を目指すため、使用される英語辞書の内容、multi-word expressions (MWEs) 「複合語表現」の記述を認知言

語学の視点から見直すことである。特に、認知的な視点でアプローチをかける海事英語辞書の製作には、MWEs に3種の比喩(メタファー・メトニミー・シネクドキ)の概念が裏付けされているため、一般英語と海事英語の境界線を曖昧にする役割を果たす。方法としては、先行研究として海事英語辞書の事例を挙げる。次に、英語辞書におけるMWEsの諸研究を検証する。さらに、認知言語学、とりわけ、多義の概念を紹介したのち、次いで、海事英語のMWEsをコーパスからデー

\* 一般科目 大島商船高専 池上彰

タ分析し、最終的には筆者が製作を試みる海事英語辞書の記述内容に触れる。また、対象とする読者は、海事英語教育に従事する教員とする。本稿で主に扱うのは海事英語<sup>注1)</sup>という専門的な英語であり、その辞書は、日本語母語話者が海事英語を学習するための2言語(英語と日本語)のものとする。教科としての海事英語は、海技教育機関で履修が定められている。現在筆者が勤務する大島商船高等専門学校の商船学科3年次より海事関係の専門英語は開講されており、一般的な英語とはその内容が異なる専門的な英語である。学生たちが海運会社に就職し、外洋航路の船舶(外航船)に乗船する際に、その海事英語は円滑な業務運営のために習得必須のものである。また、国内を運航する内航船においても、その乗組員が混乗船(多国籍の船舶)であれば、共通言語は海事英語である。それゆえ、海事英語教育への意識改革、質の高い英語辞書の製作は、輸出入の99%以上を海上輸送に依拠している日本にとって、不可避な問題であると判断した<sup>注2)</sup>。

筆者の経歴をここであげておく。30年間以上に及ぶ英語教員生活の中で、中学校、高等学校に加え、高等専門学校で勤務した。広島商船高等専門学校と弓削商船高等専門学校での指導経験の際に最も心掛けたことは、学生たちの語彙力を高めることであり、そのためには、学習の質を保証できる英語教材の開発であった。海技士国家試験等で持ち込みが許可されている現存の英語辞書は数点存在するが、そのほとんどは、見出し語に加えて訳語や句例が記述されている簡素なものである。また、辞書編纂に携わるのが、海事系研究機関の教員あるいは、海運業従事者であることが多く、辞書製作のプロフェッショナルや英語教育あるいは、英語学を専門とする教員であることが少ない。そのうえ、海技系の教育機関等での購入が確約されていることから、辞書同士の競争が起りにくい。こういった背景を踏まえると、海事英語教材の改訂や重版などは長い期間行われないこともしばしばある。

辞書は、ことばの集積体であるため、時代の流れに沿って逐次的に改訂されることが望ましい。内容も、訳語や句例のみでなく、長期的な学習計画をねらいとして、豊かな語義記述が必要である。本稿のタイトルにもなっているMWEsは、語義記述と並んで、英語学習の中で重要な位置を占める。そのMWEsとは、二つ以上の語根形態素が結びついて、一つの語彙素になることで形成されることばを表す。新しい製品・感覚あるいは、発見などは、MWEsに該当する。これらは、日常生活の中で使用されることで、最終的に辞書に記述されて、位置づけられていく。

筆者が理想とする海事英語辞書のMWEsに関する具

体的な内容は多義語、中でも比喩の概念を認知的視点から取り入れるものとする。

## 1.2 現存する海事英語辞書における記述例

ここでは、海事英語辞書としては最新のを2点取り上げ、その記述について検証する。いずれも、先述の海技士国家試験への持ち込みが許可されたものである。

### 1.2.1 『英和船用機関用語辞典』(第3版)<sup>1)</sup>

現存する海事英語辞書で最新のものである。海事英単語 port の記述は次の通りである。

port 名ポート、口、孔、窓、左舷、港 形左舷の副左舷に

MWEs は全く記述されておらず、見出し語に始まり、枠で囲まれた品詞情報とその語義に終始した内容である。これは海技士国家試験等で、時間的な制約のもとで使用するのであれば問題がない。しかし、長期的な学習計画の中で、学習を進めるにあたっては、その質を保証できる内容とは程遠い。

### 1.2.2 『英和海洋航海用語辞典』(2訂増補版)<sup>2)</sup>

この海事英語辞書は、まず見出し語、名詞、動詞の訳語を示す。さらに動詞句を展開する内容となっている。

port 左舷(の); 「取舵」; 港; 門; 開港; 左舷に向く(or ける)  
 be in port 入港している / clear a port 出港する  
 close a port (戦時・事変の時) 入港を禁止する; 港を閉鎖する  
 leave a port 出港する / make a port 入港する; 港に到着する  
 open a port 開港する; 閉鎖した港の入港を許可する  
 port the helm (舵柄を左転して) 面舵を取る「面舵」  
 run down a port 港の緯度まで子午線に沿って航し、後距等圏に沿って港に向かう  
 touch a port 寄港する

一つ目のものと比較すると、句例の記述が若干の補足的な要素を持つが、MWEs の記述に関しては、文字通りの意味のみが記述されているのみで、情報が十分であるとは言い難い。これも海技士国家試験等への持ち込みが狙いとされており<sup>注3)</sup>、習熟度を高めていく内容とはいえない。

以上、2点の海事英語辞書を例に挙げたが、国家試験への持ち込みが最優先されるものであり、学生がカリキュラムの中で計画的に学習するためのものとは判断し兼ねる。

## 2 本論

この章では、まず、MWEsに関する諸研究、具体的には、英々辞典とアジア3言語の辞典に関するものを取り上げ検証する。また、実際に COCA (Corpus of Contemporary American English) というアメリカ英語の汎用コーパスから比喩を含む MWEs の用例を示し、認知的なアプローチを経て、最終的には辞書記述を試みる。COCA の選定理由は、収録語数と年代そして、ジャンルのセクションに代表性と網羅性を含むことである。具体的には次の2点である。一つ目は、2026年現在、収録語数485,202 テキストからなる10億語以上で構成され、1990年から2019年までの各年に2,400万~2,500万語が含まれている、大規模のものであることだ。二つ目は、このコーパスはテレビ・映画の字幕、話し言葉、小説、大衆雑誌、新聞、学術雑誌のジャンルに均等に分割されているため、代表性と網羅性を有するためである。また、日常生活は勿論のこと、辞書記述もアメリカ英語が中心であることだ。

### 2.1 英語辞書における MWEs

それでは、英語辞書の MWEs 記述について1言語と2言語辞書の諸研究を概観し、検証していく。Atkins and Rundell は1言語辞書と2言語辞書の MWEs について次のように述べている。

MWEs are a central part of the vocabulary of most languages, and need to be accounted for in the dictionary. They are particularly important for learners' dictionaries, both monolingual and bilingual, since language learners may not recognize them as significant units of meaning, cannot usually compose them, and will often have problems understanding them. Some may be easy to spot (such as *kith and kin*, *kick the bucket*, or *birds of a feather*), but many are less idiomatically salient. There are several helpful tests which you can apply to a phrase you are doubtful about. The lexicographer's rule of thumb is 'its meaning is more than the sum of its parts'.

Atkins and Rundell (2008:167)<sup>3)</sup>

(MWEs はほとんどの言語の語彙の中核を成し、辞書において考慮される必要がある。1言語・2言語を問わず学習者向け辞書において特に重要である。なぜなら言語学習者はそれらを意味の重要な単位として認識できず、通常は構成できず、理解に問題を抱えることが多いからである。親戚縁者、死ぬ、類は友を呼ぶといった例は容易に識別でき

るが、多くの慣用句はそれほど目立たない。疑わしい語句にはいくつかの有用な検証法が適用できる。辞書編纂者の経験則は「その意味は構成要素の総和を超える」である。)

[筆者翻訳]

Atkins and Rundell は、辞書製作における MWEs の重要性について論じ、辞書を使用する言語学習者の立場からの見解を示しているが、確かに、学習者にとって MWEs を構成し、意味の理解に漕ぎつくことは容易ではないし、もし可能であるとすれば、歴史や文化に関する知識が相当なものであると判断できる。また、*kith and kin*, *kick the bucket*, or *birds of a feather* といった比喩の例をあげてはいるが、それらの分析については触れていない。最終的に、*rule of thumb* といった「経験則」に言及してはいるものの、それは、抽象的な判断基準である。1言語辞書における MWEs は定義(definition)が記述されており、当然ながら、これはその辞書の言語と同言語で記述される。また、MWEs が、いくつかの定義を持つ場合、その1言語で説明しているため、意味の本質を明確にすることが可能である。それに対し、2言語辞書では、訳語そのものが意味を伝達する役割を持つため、その性質が大きく異なる。訳語は、記述されている言語とは異なる言語が用いられ、外国語から自国語への(例えば、日本語母語話者の例であれば、英語から日本語へと)翻訳をする際に一役を買う。しかし、編纂者の力量、つまり、語情報や知識が大きく問われるのも確かである。更に、語義とその補足説明には2言語が使用される。英和辞典においては、訳語は日本語で記され、それに関する情報が英語と日本語で示されている。それは、2言語辞書が項目の構成要素の記述に柔軟性を持っているためである。また、英和辞典に関しては、日本語母語話者が使うことが想定されているため、語に関する背景知識を記述する場合がある。

2言語辞書における MWEs は定型的であり、比喩的でもある。またその意味はその当該言語特有のものであるとされる。特に比喩的な意味に関しては、英語との差異に十分配慮することが求められる。例えば、*jaw drops* は直訳すれば、「顎が落ちる」であるが、日本語の意味は「ぼかんと口を開ける」となる。英語の慣用句が日本語に翻訳される場合、本来英語の持つ本当の意味が失われやすくなり、翻訳にはずれが生じ、誤解を生みやすい。それは、日本語の文化や考え方が翻訳に無意識のうちに影響を与えるためである。

2言語辞書の MWEs について、アジア言語における辞書記述3例(中国語、日本語、韓国語)を例に取り、

検証したい。まずは、中国語の辞書であるが、英中辞書に関して、(Ooi 2022: 312) は次のような見解を示す。「複合語の構成要素の元の意味を正しく理解していないと、アマチュアの辞書利用者は、複合語を構成する個々の文字の意味を解読しようとする際に、見当違いをしたり、誤った情報を得たりする可能性がある」<sup>4)</sup>。複合語は歴史的出来事・文学・方言・社会変化・技術進展・言語接触など多様な起源を持つため、正確な理解には構成要素の現代的・歴史的意味に加えて成立背景や関連する文化・社会的要因を考慮し、語の起源や使用史を参照して総合的に判断することが重要である。ここでは、歴史や文化的な要素のついて触れてはいるものの、それらが比喩的な意味合いを持つことの可能性には言及しておらず、MWEs の解釈が抽象的になる可能性が大きい。

また、英和辞典について (Inoue 2022: 314) は、日本語の慣用句の英語への翻訳について、日英の文化的相違からくる意味の歪曲を懸念する<sup>5)</sup>。従って、両国の文化的背景や語のニュアンスの考慮や補足説明等を加筆してその文化における差を埋めるよう示唆する。しかし、ここで問題になるのは、歴史や文化の裏側には比喩の存在がある点だ。その点には触れていないため、やはり意味の抽象化が生じることが考えられる。

次に、韓国語辞書についての考察を行う。コーパスを使っの取り組みは1990年代から行われている<sup>注5)</sup>。辞書の語情報はコーパスから得ることが昨今の主流とされる。(Nam 2022: 318) は韓国語辞書の実用について、既存の辞書やコーパスに加えて編纂者の直感や主観的判断にも依拠している現状を述べる<sup>6)</sup>。これは、代表性・網羅性を軸とするコーパスの役割が十分に反映されていないこともあり得る。辞書記述のために抽出された MWEs は編纂者の内省による記述となるため、MWEs の種類や書き言葉・話し言葉・ウェブ言語(ウェブ上のテキスト)といったレジスターが十分に考慮されていないことが明らかであり、それに韓英両国の歴史的・文化的な要素は勿論のこと、比喩的な概念が十分に反映されにくい。

以上、この節では、MWEs についての見解を英語圏、アジア諸国の研究をもとに検証してきたが、認知的なアプローチは施されていないため、「比喩的」な視点による意味の理解は行い難いといえる。MWEs をどのように扱うのかといった点において、中国語辞書は構成要素の元の意味、日本語辞書は文化的相違からくる意味の歪曲、そして2言語辞書なら起こりうることだが、韓国語辞書については、編纂者の内省への依拠といった現実が明らかとなった。

辞書を使う目的は、意味を調べる、発音記号を確認

する、あるいは、語源を知るなどといった具合に人により異なる<sup>注4)</sup>。確かに MWEs を記述するにおいて必要な要素だと考えられるものの、一般の辞書使用者がメタファー・メトニミー・シネクドキといった比喩に相当な関心を持たない限り、支持を得るのは困難である。しかし、ひと言で「比喩」と一括りにすることで、意味の抽象化が生じ、その深い意味の抽象化が進むのもまた事実である。MWEs における意味の記述は比喩的な視点を絡めて、記述することがより深いものとなっていく。次節では、日本語母語話者のための学習用英和辞典から具体例を取り上げて MWEs を検証する。

## 2.2 学習用英和辞典における MWEs

ここで、実際に記述されている一つの例として、hospital に関する MWEs を概観していきたい。中心義は「病院」である。これは、まぎれもなく、最も使用頻度の高い語義であるが、MWEs となれば、国ごとに意味が異なってくる事実もある。

### 事情 hospital と「病院」

hospitalは通例大きな総合病院をさし、入院が中心。一般開業医(general practitioner, GP)がかかりつけの医師(family doctor)となる。米国では、かかりつけの医師が個人医院(doctor's [physician's] office)や付属診療所(clinic)で最初に外来患者を診察し、専門医(specialist)を紹介したり、必要な場合はいずれかが契約している病院に送り主治医となる。英国ではかかりつけの医師に診察を受けた後、必要に応じて専門医(consultant)にかかる。入院が必要な場合、緊急時を除いては、かかりつけの医師が病院を紹介し入院の手続きをし、病院が全責任を持つ。したがって、最初の段階では、see [《主に米・くだけで》] go see a [one's, the] doctor (医者に診てもらう)、go to a [one's, the] doctor's (office)(医者に行く)が普通で、go to (the) hospital は通例入院が必要な病気を暗示するので注意。

図1 hospital の項より引用<sup>7)</sup>

上図の説明のように、日本語母語話者の思う「病院」と、英・米での hospital がさす意味も相違がみられることは勿論であるが、see a doctor と go to hospital の違いにも注目することが出来る。日本語母語話者にとって「医者にかかる」は大抵の場合、「病院に行く」ことを意味し、英・米のように段階を経ているものではない。ことばを訳す際にはそのような国によって違う制度や社会事情への造詣も提供項目であると考えられる。辞書の記述にはスペースの制約が生じるが、この記述は認知的な視点が盛り込まれていない。MWEs には国による理解の相違のみでなく、比喩的な理解が必要である。

## 2.3 多義語と意味ネットワーク

認知言語学について少し触れておきたい。これは、人間の認知プロセスを基盤とした言語研究の枠組みであり、人間が身体を基盤として、脳や精神により行う知的・感性的な営みのことを指す。また、この理論的枠

組みは、「視点」に重点を置く。通常、語には複数の意味があり、それらは互いに関連し合う。この特性を多義という。ことばの多くは多義語であり、複数の意味を持つとされる。中心義<sup>8)</sup>(基本義ともいう)<sup>注5)</sup>から拡張されたものが周辺義(比喩義)として捉えられ、メタファー・メトニミー・シネクドキとされる。これらの比喩は、語源をベースとし、中心義から比喩的に意味拡張され、展開する。それらはいずれも、類似性・隣接性・包摂(含)性といった性質を持つ。下図は、それを示す。語義同士の関連性が理解出来れば、英語の語彙学習は比較的容易になる。中心義から推測できる周辺義との意味的な繋がりを辞書の記述に応用することで、日本語母語話者の英語学習の中で語彙指導がこれまで迎ってきた暗記重視の方法に相反する。

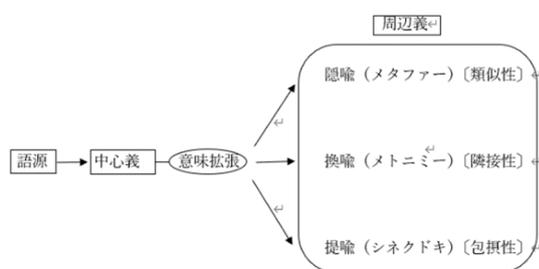


図2 多義ネットワーク図

海事英語という専門的な英語を理解する上でも、一般英語と併せてこの関連性を把握することは、語の習得に一役を担う。次に、日本語の例を挙げながら、3種の比喩について述べてみる。まずはメタファーである。

あの人は職場の花である。

これは、存在が素晴らしい対象を「花」に見たてた例である。抽象的でわかりにくい対象を、具体的でわかりやすいものに見立てる働きつまり、「見立て」の要素を持ち「類似性(similarity)」に基づく意味現象である。次に、メトニミーである。

目が充血している。

たしかに、日常的にはよく使われている表現であるが、これも認知的に分析すると、実際に血液で赤く染まっているのは、眼球であり、「目」が「眼球」に指示がずれたパターンでことばの「横滑り」と捉えることが可能だ。これは「隣接性(contiguity)」と呼ばれる。最後

に、シネクドキを考える。

花見に行こう。

この「花」は言うまでもなく、「桜の花」を指す。これは「類と種の関係」に該当するもので、シネクドキの基本とされる。類は「花」であり、「種」は「桜」となる。「花」が「桜」を包摂し、構成される比喩であり、「包摂性(inclusivity)」の性質を持つ。後のコーパスによるMWEsの分析では、3種の比喩を含む用例を取り上げていく。

筆者が製作を試みる海事英語辞書の製作は、多義ネットワークの図をもとに認知的アプローチを取り入れ、その質を保証するものとした。次節で於いては、コーパスからのデータを基にMWEsを概観し検証する。

## 2.4 コーパスでの海事英語 MWEs 認知的分析

それでは、海事英語の語をコーパスで検索し、3種の比喩を含むそれぞれのMWEs(port in a storm, take the helm, all hands on deck)を考察する。検索条件は、すべて上記のMWEsをリスト検索し、FREQUENCY(頻度)をセクションごとに表示されるものとする。年代は、1990年から2019年まで幅広く検索した。併せて、KWIC(Keyword in context)でも前後の文脈を確認した。そして、筆者が考案する辞書の記述を挙げてみたい。まずは、COCAの検索ページが示すデータである。

最初にメタファー表現 port in a storm について考えてみる。



図3 port in a storm のセクションと年代別の数<sup>9)</sup>

この port in a storm に関しては、全体的な頻出数は高くはないものの、TV/M(テレビ・映画)あるいはFIC(フィクション)に大多数の例が見られる。年代別では、2000年代初期に多い。これは、文学や映像の世界で、このMWEsが多く使われたことを意味する。また、海事英語のメタファーが文章表現として一般に浸透していることも明らかである。辞書記述は、この中からメタファー表現を採集する。KWICを検索してみると、portの前1語の出現は、Anyが多いため、辞書の記述はAny port in a stormとする。全ての検索例は、37に上るが、ジャンル・年代別の検索は、時代とことばの変遷を伺うことが可能になる。

二つ目は、メトニミーの take the helm を取り上げる。



図4 take the helm のセクションと年代別の数<sup>10)</sup>

ここでも、興味深いのが、TV/Mの数字が38であること、それはALL(全体)の頻出数164に対して40%強の割合を占めていることである。次いで、BLOG(ブログ)とMAG(雑誌)とが続く。これらも、文章表現の世界で1990年代後半にその数が多い。21世紀に入って、頻度は僅かに減少するが、2015年あたりにはまた増加した。特に、ブログの頻度が比較的高いが、これは1990年代からインターネットが普及し、個人でも文章表現が公開できる状況が反映されたことが明確だ。KWICを検索してみると、takeの前2語の出現は、人+toの出現パターンが多くを占める。何かの舵取りをその人に任せるといった解釈が可能である。辞書記述にも、toは補足的に加える。

最後は、シネクドキの all hands on deck である。



図5 all hands on deck のセクションと年代別の数<sup>11)</sup>

all hands on deck はその総数が279ではあるが、セクションごとの数ではTV/Mが半数以上近くを占めて最多である。SPOK(話し言葉)がそれに続き、さらに、BLOGが3位となる。特に、「全力を尽くせ」などの号令として使用されるこの表現は、船員が海上勤務中は勿論のこと、ビジネスシーンでも使用される。年代別では2015年以降に多く集まる。前1語の出現は、need, require, wantといった何かを要求する動詞が出現する。従って、辞書記述にもそれを加筆する。シネクドキは総数の多さ(273)から、十分に辞書記述の価値を高めている。

これら3種の比喩はセクション別にみても、TV/Mがそれぞれ最高頻度を占める。つまり、映像といった芸術の中での頻出度を考えた際に、人間の想像力を掻き立てる技法として定着していることが明らかだ。

## 2.5 筆者による海事英語辞書のMWEs記述

次に、その技法を盛り込んだ、筆者による海事英語辞書の記述をCOCAからの文例を挙げながら検証していき、辞書記述を具体的に挙げていく。具体的には、「MWEs」を表記し、「直訳」と「意訳」に分け、特に

意訳は重要である。「用例」に関しては、コーパスからの英文を参考にして、分かり易くリライトし、日本語訳を付す。解説部分では、簡素な語情報を追記することにした。筆者が構想とする辞書における辞書ラベルは次の通りとする。

### multi-word expressions (MWEs.)

メタファー	(メタ)
メトニミー	(メト)
シネクドキ	(シネ)
用例	(例)
解説	(解)

まずはメタファーport in a stormの例を挙げる。

I could be rich and married by next week. Well, if he's not a serial killer, he's kind of cute. And divorced. Any port in a storm. Oh, there's my daughter. Let me in. (COCA・TV/M)<sup>12)</sup>

(来週には金持ちになって結婚できるかも。まあ、連続殺人犯じゃなければ、彼は結構かわいいし。それに離婚している。困った時は助けてくれる人がいれば。あら、娘だわ。開けて。)

[筆者翻訳]

具体的には、テレビドラマあるいは映画のセリフであるが、この場面から想定して、「海」は無関係であると判断してよい。「困った時は助けてくれる人がいれば」はまさに、「急場のしのぎ」に該当する。このport in a stormは『ジーニアス英和辞典』(第6版)portの項<sup>13)</sup>によると、anyと共起して、「窮余の一策」という意味である。これは、海事英単語のportが、「見立て」により、ある種の「逃げ場」として表現されている。まさに、この語がメタファーと捉えられる。人を船に喩えて、「嵐」で荒れる海の中を彷徨い続けるくらいならば、「港」に逃げ込んで安全策をとる選択をする様子が伺える。その辞書記述は次の通りである。

### [辞書記述]

#### any port in a storm (MWEs.)

直訳:「嵐の中ではどのような港でも構わない」  
意訳:(メタ)「窮余の策」

(例) Any port in a storm. For her, it was remarriage.

(窮余の策?彼女にとってそれは再婚だった。)

(解)ここでは、portが日常生活の「逃げ場」とい

う意味で使われている。船が人や荷物を乗せて辿り着くのと同様に、人間が精神的に到達することを示す。海事の意味では「港」であるが、日常では、比喩的に何かが入り出る「場所」として使われる。any を伴い「どのような港でも」という意味になる。

辞書使用者は、「港」が比喩的な意味に拡張されることを掴むことが出来る。このような「見立て」はメタファー写像<sup>注6)</sup>と呼ばれる認知能力がもともになる<sup>14)</sup>。

次は、helm の MWEs をメトニミーtake the helm の例から考えてみたい。

In fact, I think we just went over something. Pablo, come take the helm! Okay! Wait' til we get to the middle of the channel and I say hard to port. Hard to port. All right.

(COCA・TV/M)<sup>15)</sup>

(実はさっき何か見落とししたと思う。パブロ、舵を取ってくれ。よし。水路の真ん中まで来て俺が「左舷へ急旋回」と言ったら待っている。左舷へ急旋回だ。わかったか。)

[ 筆者翻訳 ]

本来、helm の意味は「舵」であり、複合語 take the helm の直訳は「舵を取る」という意味になる。『ジーニアス英和辞典』(第6版)helm の項によると、「〔船の〕かじを取る」<sup>16)</sup>と記述されている。ここで take the helm の MWEs 辞書記述を挙げる。

#### [ 辞書記述 ]

take the helm (MWEs.)

直訳: 「舵を取る」

意訳: (メト)「舵を手にとって船を操作する」

(例) Take the helm. I'll keep watch on the opposite shore.

(舵を取ってくれ。私は対岸の様子を伺う。)

(解) 一般的に、helm は「舵」を意味するが、それは船の部位であり実際には、単に「舵を取る」のではなく、「舵を取って船を適切な方向へと進める」が正しい。take には、不定詞の to を伴うことが多い。

このように、メトニミーは、ある複合語の前後を省略しても、文意が通る。「舵を取る」のは、「指示のずれ」であり、これを、「隣接性・近接性」と表現できるが、

日常生活の中ではこのパターン(メトニミー)が頻出する傾向が強い。また、メトニミーには人間の参照点能力<sup>注7)</sup>が働いている<sup>17)</sup>。

最後にシネクドキ all hands on deck の例を挙げる。

Where are you? Hogarth called an emergency meeting. I can't make it. Babe, it's all hands on deck. We rely on you.

(COCA・TV)<sup>18)</sup>

(どこにいるの? ホガースが緊急会議を呼びかけたわ。行けないの。ベイブ、今まさに総力戦よ。あなたを頼りにしているの。)

[ 筆者翻訳 ]

『ジーニアス英和辞典』(第6版)hand の項では、「(号令) 全員甲板へ; (一般に) 一人一人が自分の持ち場で全力を尽くせ」<sup>19)</sup>とある。これも直訳してみると、「デッキ上での全ての手」である。しかしこれでは、文意が伝わることはない。この hands は紛れもなく、「人間の手」であり、他の動物等の手を表すものではない。辞書の記述は以下の通りである。

#### [ 辞書記述 ]

all hands on deck (MWEs.)

直訳「デッキ上での全ての手」

意訳(シネ)「自分の持ち場で全力を尽くせ」

(例) To make this major project a success, we need all hands on deck.

(この大きな事業を成功させるには全員の協力が必要です。)

(解) hand は「手」を表す。しかし、この複合語表現においては、まぎれもなく、人の手であり、もっと言えば、労働力のことを指す。手にまつわる表現は、日本語でも「働き手」、「男手」、「女手」あるいは「先手(さきて)」などのように、仕事や労力にまつわる語が存在する。また、all hands on deck は、need, require, want といった「必要・要求」を示す動詞に導かれることが多い。

この「手」は前出の、「人間の手」を表すもので、「類と種の関係」が成立する。このように、シネクドキは包摂性に基づく。deck は甲板であり、この all hands on deck は海事英語表現であると判断できる。

これら3種の比喩は、多義的であり、それらは婉曲的でもある。つまり、直接的な表現を避ける場合に、こ

ういった比喻表現は一役を担う。海事英語辞書に多義語の概念を取り入れることは、日常生活における文章表現の習得にも大いに役立つと考えてよい。そのためには、長期的な指導計画のもとで、専門家による一般英語と海事英語を比較しながらの教育は、学習者の能力を引き上げることにつながる。

### 3 結論

対外貿易の過半数を海上輸送に委ねている日本にとって、国際航路の船員養成機関における教育、特に海事英語教育のレベル向上は常に期待されるべき課題である。しかし、その教材、とりわけ海事英語辞書に関しては、一定数の購入が保証されているためか、長期間刷新されることも少ない。また、その内容は英単語帳を思わせるものであり、質的には、使用者の長期的な学習に適するとは言いかねる。こういった、既存の海事英語辞書の実態に啓発する目的で、MWEs を認知的な視点から記述することを試みた。2 言語辞書における MWEs の考察に関しては、歴史・文化的背景の視点だけでなく、認知的なアプローチも必要である。3 種の比喻を含む表現は、コーパスからのデータを基に、テレビドラマや映画といった、視覚的なものに多数の用例が見られた。これは、海事英語の MWEs が人間の日常生活にある程度認知されていると判断できる。つまり、この視点が学問的な討議に寄与することにより、一般英語と海事英語の関係性への深い洞察を得ることが可能となる。また、実用的なアプローチとしても多大な意義を持つ。このことは、辞書英語や語学学習への新しい取り組みをもたらし、さらに、海運業界への啓発が期待される。それは国の輸出入の過半数を海上輸送に委ねる日本にとって大きな期待が高まることを意味する。

語義の中には、時代とともに淘汰されるものがあれば、受容・導入されるものも現れる。その変化に対応するために、具体的課題として挙げられるのは、今後は、筆者が製作を試みる海事英語辞書編纂のため、海事関係のジャーナルや、映画・小説・ニュースといった分野から文書データを収集し、辞書作成目的の独自コーパスを構築する。また、そのコーパスもある程度、逐次的に更新され、辞書も定期的な改訂を目指す。そのためには、継続的な研究を重ねる次第である。

#### 参考文献

- 1) 商船高専機関英語研究会, 『英和船用機関用語辞典』(第3版), 194, 海文堂, (2022).
- 2) 四之宮 博, 『英和海洋航海用語辞典』(2訂増補版), 219, 成山堂書店, (2022).

- 3) Atkins, B. T. S. and Rundell, M., *The Oxford Guide to Practical Lexicography*, 167, Oxford University Press., (2008).
- 4) Ooi, V.B.Y., "MWEs in Chinese": Aspects of multi-word expressions in Asian lexicography In Jackson, H. (ed.), *The Bloomsbury Handbook of LEXICOGRAPHY*, 312, Bloomsbury Publishing Plc., (2022).
- 5) Inoue, I., "MWEs in Japanese": Aspects of multi-word expressions in Asian lexicography In Jackson, H. (ed.), *The Bloomsbury Handbook of LEXICOGRAPHY*, 314, Bloomsbury Publishing Plc., (2022).
- 6) Nam, K., "MWEs and Korean Lexicography": Aspects of multi-word expressions in Asian lexicography In Jackson, H. (ed.), *The Bloomsbury Handbook of LEXICOGRAPHY*, 318, Bloomsbury Publishing Plc., (2022).
- 7) 『Dual ウィズダム英和辞典(第4版) WEB版』  
(<http://wdme4.dual-net/mainnew.cgi?elementtype=1&str=hospital&pagepos=0&headsearch=1&conditiontype=1&fksubmit.x=0&fksubmit.y=0>) (参照 2025-12-15)
- 8) Rosch, E., "Natural categories" In *Cognitive Psychology* 4, pp. 328-350., Academic Press., (1973).
- 9) COCA, TV/M, 'port in a storm.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2025-12-15)
- 10) COCA, TV/M, 'take the helm.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2025-12-15)
- 11) COCA, TV/M, 'all hands on deck.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2026-2-15)
- 12) COCA, TV/M, 2019, 'port in a storm.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2025-12-15)
- 13) 南出康生・中邑光男, 『ジーニアス英和辞典』(第6版), 1585, 大修館書店.(2023).
- 14) Lakoff, G., "The contemporary theory of metaphor," In A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought, 2nd edition*, pp. 202-251, Cambridge University Press., (1993).
- 15) COCA, TV/M, 2015, 'take the helm.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2025-12-15)
- 16) 南出康生・中邑光男, 『ジーニアス英和辞典』(第6版), 978, 大修館書店.(2023).
- 17) Langacker, R. W., *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter, (2000).
- 18) COCA, TV/M, 2019, 'all hands on deck.'  
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2025-12-15)
- 19) 南出康生・中邑光男, 『ジーニアス英和辞典』(第6版), 940, 大修館書店.(2023).

#### 注記

注1) 本稿では、海事英語を「船舶の構造、設備、運用、海洋、

気象、漁業、海運、造船などに関する広範囲な専門英語」と定義する。それは、航海英語と機関英語に分類され、いずれも出入港時に用いられる。

注2) 国土交通省 資料海事局関連「省エネ補助金制度について・海事分野を取り巻く現状による」スライド2枚目を参照。

(<https://www.mlit.go.jp/common/001031358.pdf>)

(参照 2025年2月25日)

注3) 北陸信越運輸局「海技士国家試験受験の手引き 試験場に受験者が持ち込むことができる図書及び器具等」を参照。

(<https://www.wtb.mlit.go.jp/hokushin/hrt54/vessel/kaigi/mochikom.html>)

(参照 2025年2月25日)

注4) 寺嶋健史「英語専攻大学生の英語辞書使用に関する調査(1)」を参照。p. 90 表10に英語辞書の参照情報が記述されている。

([https://matsuyama-u-r.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2862&file\\_id=22&file\\_no=1](https://matsuyama-u-r.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2862&file_id=22&file_no=1))

(参照 2025年2月25日)

注5) 語の意味は文字通りの意味(中心義)から文字通りではない意味(周辺義あるいは比喩義)へと広がる。

Rosch(1973)のプロトタイプ理論がベース。プロトタイプとは、カテゴリーを代表する「典型的成員」を表す。この典型的成員が存在すれば、典型的ではないもの、つまり中心的ではないものが存在する。認知言語学では、典型的な字義をプロトタイプとし、中心義として扱う。

注6) Lakoff(1980)による。metaphorical mapping と呼ばれるもので、具体的で分かりやすい概念から、それに対応する抽象的で捉えにくい概念へとその一連の構造を移すこととされる。

注7) 認知能力の一つであり、目標や対象を理解あるいは指示するための能力をさす。Langacker(2000)を参照。その目標を直接の理解が困難な際、より理解し易い別のものを使うことで目標を把握する。この理解し易いものを「参照点」と呼ぶ。